

<前回>オリエンテーション

後期：古代キリスト教から中世、そして宗教改革

オリエンテーション	9/29
1. ゲルマン民族とキリスト教	10/6
2. キリスト教修道制	10/13
3. 中世キリスト教世界のダイナミズム	10/20
4. キリストと文化——スコラ的文化総論	10/27
5. 自然神学の諸問題	11/10
6. 研究発表（角元）	11/17
7. 研究発表（金）	11/24
8. 研究発表（山本）	12/1
9. 研究発表（長岡）	12/8
10. イスラームと12世紀ルネサンス	12/15
11. フィオーレのヨアキムと歴史神学	12/22
12. 中世都市と民衆の宗教性	1/12
13. 宗教改革と近代世界	1/19

1. 中世キリスト教と宗教改革

佐藤彰一『中世世界とは何か』（ヨーロッパの中世1）岩波書店、2008年。

「ヨーロッパ史の「中世」は、ヨーロッパ半島が回廊地帯であることをやめた段階で終焉を迎えたと言い換えることができるだろう」、「長く西ヨーロッパを「中心」たらしめていた「ギリシア・ローマ帝国」がゲルマン民族に倒され、今度は勝利したゲルマン人を盟主としてこの世界が歴史を歩みはじめたとき、この世界は東地中海をシステム上の「中心」とする「半周縁」とも言うべきポジションにおかれることになった。「半周縁」からの出発をヨーロッパ中世の始まりと設定し」（21）

5世紀から15世紀

16・17世紀：中世から近代への移行期（近世）→古プロテスタンティズム

18世紀から：近代 → 新プロテスタンティズム（トレルチ）

- ・「宗教改革」を中世と近代の移行において捉える。
- ・サブシステム間の時差
- ・地域と伝統の多様性

2. 中世という時代は「ヨーロッパ的なもの」の生成・現実化のプロセス

cf. 古代キリスト教の理念の変容と実現

3. ユダヤ人の運命：古代から中世へ

・ユダヤ教（聖書とタルムード。シナゴグ）を共有する民族としてのユダヤ人。
バビロニア・タルムード編纂（490年頃）

・イベリア半島のユダヤ人：キリスト教への改宗の強制＝マラノと呼ばれ差別。

サラセン帝国下での寛容政策によりマラノの多くはユダヤ教に復帰。

スファラド（ヘブライ語でスペインの意味）系ユダヤ人の成立。

11世紀から12世紀：スペインのユダヤ文化の黄金時代。

イベリア半島のキリスト教化（レコンキスタ）

13世紀の迫害（スペイン帝国での異端審問のための宗教裁判所の設置）で、多くのユダヤ人は再度マラノになるか、国外へ追放。

- ・ヨーロッパ北部（アルプスの北側）のユダヤ人：アシュケナージ系ユダヤ人。

西ローマ帝国（ローマを中心としたカトリック文化圏）においても、ユダヤ人への反感は存在していたが、東ローマ帝国におけるような迫害はなく、世俗君主もユダヤ人を優遇。10世紀から11世紀にかけての転換。抑圧の強化。十字軍（11～13世紀）の影響。ユダヤ人差別の定着（16世紀にはゲットーの設置）

アシュケナージ系ユダヤ人の追放。東ヨーロッパ（ホーランド、リトアニア、ラトビアなど）へ。

- ・中世のユダヤ思想としての神秘主義・カバラ

1. ゲルマン民族とキリスト教

<年表>

375:ゲルマン民族大移動の発端（フン族に追われ東ゴート族がドナウ川を渡り、東ローマ帝国内へ避難）

395:ローマ帝国東西に分裂、西ゴートのアラリックがギリシャに侵入

406:リーメス（ライン川とドナウ川に沿ったローマ帝国の国境防備線）の大決潰

410:西ゴート、ローマ侵入

431:ヴァンダル族、アフリカ侵入

449:アングロ・サクソン族、ブリタニカ侵入

455:ヴァンダル族、ローマ占領

476:西ローマ帝国滅亡

482:フランク王国、メロヴィス1世(482-511)、メロヴィング朝（486-751）

498:クロヴィス、カトリックの回心(受洗、498)

516:ブルグンド、カトリックに回心

603:ランゴバルド、カトリックに回心

c.610:イスラームの成立

642:サラセン軍、エジプト侵入

661-80:ウマイヤ朝

711:サラセンによって西ゴート王国の滅亡

732:ツール＝ポアチェーの戦（カール＝マルテル、サラセン軍を破る）

751:ピピン、カロリング朝(751-843)

756:ピピン、ラヴェンナ太守領を教皇に寄進

768-814:チャールズ1世（大帝、カール、シャルルマーニュ）

c.789:ノルマン人のイングランド侵入

800:セルビア人、キリスト教に帰依

843:フランク王国三分

950:ハラルド（デンマーク王）のキリスト教公認

354-430:アウグスティヌス

391:キリスト教の国教化

406:ウルガタ（Vulgata、ラテン語訳聖書）の完成

440-61:レオ1世、教皇権の主張

484-518:東西教会の分離

525:モンテカッシーノ修道院創建（ベネディクト修道会の成立）

590-604:グレゴリウス1世、教皇尊称の普遍化、グレゴリオ聖歌

649:ラテラノ公会議（キリスト単性論を排斥）

726-843:聖像問題

1. コーマ帝国／ポスト・ローマ国家、小国家時代

民族移動後の数百年＝エトノス生成、流動性の高い集団から、民族と呼ばれる
政治集団が創出

ローマ帝国のガリア征服、征服の対象としてのガリア人、ケルト人

cf.ゲルマン人の異質性、「まつろわぬ土地」

ライン川の向こう側

2. ゲルマン民族の移動の影響

「いわゆる暗黒時代」「早くからローマ文化および教会との直接の交渉を有したフランク族のカロリング朝王廷と、ローマの外にビザンティン帝国の媒介によってギリシア文化の片鱗に触れることのできたイギリスの修道院とは、すでに八世紀以来中世文化の曙光を見たが、ドイツ人の目覚めは著しく遅れて、政治的にはオットー一世以来、宗教的・思想的・文化的には第十一、二世紀にもなお素朴の域を脱し得なかった。」（石原、551）

「その惨憺たる焦土の中に生き残ることのできたのは、地上に頼るべきものを初めから所有しないキリスト教のみであったが、そのキリスト教も礼拝堂や国権によって保証された土地を劫掠焼棄された例は少なくない。かくして古代文化との連続がすべて中断されて、新しい民族の人々により、新しい地域に、新しい社会を徐々に構成して獲得した成果が、即ち中世ヨーロッパに外ならず、そして近代世界の基礎が築かれたのである。」（554）

↓

古代の終焉、暗黒？

しかし、地域によっては、古代と中世の連続性は一定程度確保された。

アフリカでは、ローマ帝国の徴税制度が機能し続けた。

古代と中世との関係性については、より詳細な考察が必要。

3. ゲルマン民族のキリスト教化

ゴート族はまずアレイオス派キリスト教を受け入れる。

ウルフィラス(Ulfilas, c.311-383)による聖書のゴート語訳、ゴート族への伝道。
アレイオス派キリスト教とカトリックとの対立。

ボエティウスは、投獄され（『哲学の慰め』を執筆）、国家（東ゴート王国）の裏切り者として処刑(524年)。

後に、アレイオス派から、カトリックへの改宗。グレゴリウス一世は、ゲルマン諸民族のカトリック化の意義を認識していた（ゲルマン宣教構想）。

ビザンティンからフランクへの転換。

↓

ゲルマン宣教の意義と問題

4. ゲルマン後継国家において、教会はカトリック教会の支部であるものの、「教皇以下の聖職者制度としての **Hierarchia** とは関わりなく独立し、ただ信仰上の事項に関してのみ「道徳的に」教皇の公式の司教の下に服従する義務を有する」（566）、「いわゆる「地方教会」（**Landeskirche**）を形成した」、「教皇権の発達に従って対立の度を加えたが、その対立はすでに中世初期にその端を発し、中世における政治抗争の因をなした」（567）

↓

西欧ラテン世界における教会的秩序の分析

5. 「民族移動の混乱期においてすでに中世ヨーロッパにおけるカトリシズムの中心勢力をなすべき礎石を据えた第一の基調は、言うまでもなくローマ教皇の東帝国およびビザンティン教会からの独立と、西方諸民族の精神的指導権の確立とである」、「レオー一世」（554-555）

「レオー一世以後のローマ教皇、殊にグレゴリウス一世はペテロの聖座の継承者として、地上における「キリストの代理者」（**Vicarius Christi**）の地位を占め」（565）

↓

「ペテロ＝岩＝教会」という理念の成立の意義と問題

<参考文献>

1. 佐藤彰一『中世世界とは何か』（ヨーロッパの中世1）岩波書店、2008年。
2. 石原謙『キリスト教の源流』岩波書店。
3. H.I.マルー『教父時代』講談社。
4. J.ペリカン『中世神学の成長(600-1300年)』教文館。
5. K.リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社。
『中世思想史』平凡社ライブラリー。
6. 鈴木宣明『ローマ教皇史』教育社。